

宗教で読むアメリカの大統領

——ブッシュの戦争からオバマの国民和解の神学へ

2009年5月30日 於：恵泉女学園大学
関西学院大学法学部 栗林輝夫

アメリカ合衆国には「政教分離の原則」の長い伝統があるが、同時に宗教、とくにキリスト教と政治が分かちがたく結びつくという宗教国家の特質がある。独立戦争、奴隷制の廃止、女権獲得運動、禁酒法から60年代の公民権闘争、そして今日の妊娠中絶や同性婚の是非をめぐる問題まで、政治は宗教に道徳的な権威付けだけでなく、運動のリーダーシップや事実上の政策活動すら期待してきた。そして80年代以降、宗教はそれまで以上に深くアメリカの政党政治に関わるようになった。その顕著なケースが宗教右派とリベラル入り乱れての近年の大統領選挙戦である。今回はブッシュ前大統領とオバマ新大統領の信仰と政治を比較しながら、アメリカ社会における宗教と政治の関係、両大統領の宗教理解と政策の違いを考える。

はじめに

「大統領の職責は牧師と同じである。彼は二億人の羊飼いなのであるから」



『ニクソンの神学』（1972年）

「市民宗教」というアメリカ教

大統領は国の「司祭」「牧師」「預言者」

第43代大統領ブッシュ大統領の場合

「自由と恐れ、正義と野蛮は常に抗争してきた。神はその間で中立ではない」(2001年同時多発テロ直後の議会演説で)

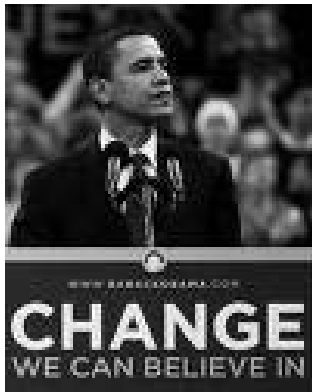
1. ジョージ・W・ブッシュとは何者か。その経歴を振り返る
2001年の同時多発テロ 愛国主義の高揚
2. ブッシュの信仰は「ボーン・アゲイン」の福音派
ブッシュはいかにしてキリスト教徒になったか
抽象的に考えることが苦手なブッシュ
3. 政治家ブッシュの政策と宗教
テキサス州知事時代の事情
大統領選挙キャンペーンでの保守的キリスト教の組織的動員
4. ブッシュは「根性のプレーヤー」
ホワイトハウス人事では宗教右派と福音派が躍進
たとえばジョン・アシュクロフト司法長官
人工妊娠中絶と同性婚問題で揺れるアメリカ世論
「テロリズムとの戦い」を掲げて愛国主義を鼓舞
5. イラク侵攻とブッシュの「戦争の神学」
メソジストというよりもカルヴァン主義の戦闘的神学か
ブッシュの善悪二元論と「悪の枢軸国」



イラク戦争は「神の声」？
ネオコンの論理と宗教右派の終末的信仰
ブッシュの「帝国の神学」（ジム・ウォリス）の破綻
福音中道派の離反

第44代大統領バラク・オバマの場合

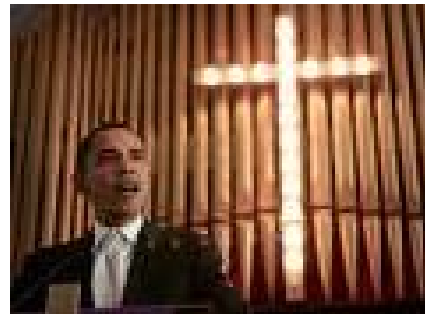
「黒人のアメリカも、白人のアメリカも、ラティノのアメリカも、アジア系のアメリカもない。あるのはアメリカ合衆国」（2004年民主党大会基調演説で）



1. バラク・オバマとは何者か ——その経歴を振り返る
2. オバマのキリスト教は20歳代後半から
世俗主義から進歩的な黒人教会の会員へ
3. 2008年大統領選挙と「神問題」
民主党のアキレス腱は信仰問題
宗教右派との対立を鮮明化したオバマ
「オバマ旋風」——福音派左派の登場と中道勢力への働きかけ
ヒラリー・クリントンとの競合と差別化
4. オバマの信仰は「過激な黒人神学」？
ジェレマイア・ライト牧師のトリニティ合同教会
ジェシー・ジャクソン師（公民権闘争世代）やジェームズ・コーンとの距離感
5. オバマの「国民統合の神学」
ラインホルド・ニーバーの神学とオバマ

おわりに

熱烈な宗教国家としてのアメリカ
宗教右派と宗教左派の今後の動向は？
2010年の中間選挙はどうなる



参考文献

- 栗林輝夫『ブッシュの「神」と「神の国」アメリカ』（日本キリスト教団出版局、2003年）
『キリスト教帝国アメリカ』（キリスト新聞社、2005年）
『アメリカ大統領の信仰と政治』（キリスト新聞社、2008年）
『アメリカの戦争と宗教』（共著 新教出版社、2004年）
『ブッシュ政権のグローバル戦略と宗教』（共著 関西学院大学出版会、2004年）
蓮見博昭『宗教に揺れるアメリカ—民主政治の背後にあるもの』（日本評論社、2002年）
『9・11以後のアメリカ 政治と宗教』（梨の木舎、2004年）
『宗教に揺れる国際関係』（日本評論社、2008年）
森孝一『宗教から読むアメリカ』（講談社メチエ、1996年）
ハロラン英美子『アメリカ精神の源』（中公新書、1998年）

読む

オバマ大統領就任によって、アメリカ合衆国の歴史は大きな節目を迎えた。合衆国は、その独立宣言のなかで「すべての人間は神によって平等に造られ、一定の譲り渡すことのできない権利をあたえられており」と高らかに謳っておきながら、この権利を先住民やアフリカンから長い間奪ってきただけで、南北戦争、公民権運動をおしてこの奪われた権利を主張してきた。

キング牧師が先の独立宣言の一文を引用して語った夢は、あらゆる人種の人々を取りあわせて、アメリカの未来を形成することだった。アフリカンであるオバマが大統領に就任したことは、いよいよキングの夢がかなった大きな一歩である。もちろん、今もってマイノリティーに貧困のしわ寄せがされていることや、新移民の人権が奪われていることを考えると、このような見方はあまりにも楽観的ではある。とはいっても、今こそアメリカ合衆国の歩みを学ぶ好機であると言える。

さて、本書は、日本では「大統領の家系がベトナムを飼うか」ほどの関心を持たれない、大統領の信仰について書かれた本である。類書もないわけではないが

『アメリカ大統領の信仰と政治』

—ワシントンからオバマまで—

栗林 輝夫・著

—例えば、ヒラード・リンダー著『アメリカの市民宗教と大統領』—、歴代の大統領と宗教との関係について、これまで入門者にもわかるような親切に書かれたものはない。また本書は、就任ばかりのオバマ大統領の信仰についても詳しく扱っている。

本書を読んで改めて確認できたことは、大統領の信仰はどれだけの外交政策と密接に結びついているということである。特に膨張主義を強く打ち出した頃から、合衆国



キリスト新聞社 2009年3月7ページ 2100円

▽栗林輝夫（くりばやし）は、関西学院大学法学部教授、同大学キリスト教と文化研究センター長、国際基督教大学、東京神学大学大学院を経て、1976-85年、アメリカ、スイス、ドイツに留学。91-93年、クラジエイト・セオロジカル・ユニオン（カリフォルニア）客員、F.H.D.（博士）著『キリスト教とアメリカの神』、『神の国』、『アメリカ』などがある。

評・大宮 有博

(名古屋学院大学・教員)

本書によって、アメリカの政治が深いところまで宗教と結びついていることが、日本の読者に理解されることを希望する。

宗教に揺れるアメリカ—民主政治の背後にあるもの 蓮見博昭著



(「BOOK」データベースより)

多文化社会アメリカにおける政教関係の歴史の変遷を多文化社会の変容と関連づけて概観するとともに、政教関係に関するアメリカの研究動向をも簡単に紹介。また、一九六〇年代以後、政教関係の「媒介環」という役割を果たすと考えられるようになった宗教関係利益団体について、その役割と特質を考察。次いで、アメリカ・キリスト教各派の「政治化」、つまり政治的活動の活発化と大統領選挙などへのその影響を論じる。さらに政教関係が激しく緊張する「戦争」について検討。第二次世界大戦以後のアメリカにおける主な宗教関連社会・政治問題として、「中絶」「同性愛」「公教育での宗教」の三つを挙げ、それぞれについて、とくに政治システムとの関連

を中心として概説。最後に、ごく新しい動きに注目して、今後の展望へとつなげていくと同時に、アメリカにおける多文化共生とキリスト教の関係を総括する。

はすみ・ひろあき

現在、恵泉女学園大学名誉教授。1933年東京生まれ。東京外国語大学(欧米第一課程)卒業後、時事通信社入社、ロサンゼルス、ニューヨーク、ロンドン特派員、解説委員、出版局長などをつとめる。1989年以來、恵泉女学園大学人文学部英米文化学科教授(アメリカ政治担当)、2001年より同大学の大学院教授を兼任。04年3月、同大学を退職後、現職。

主な著書には、『宗教に揺れるアメリカ—民主政治の背後にあるもの』(2002年、日本評論社)、『G・Wブッシュ政権とアメリカの保守勢力』(2003年、共著、日本国際問題研究所)他
主な訳書には、マーチン・ルーサー・キング著『汝の敵を愛せよ』(1965年、新教出版社)
ヘドリック・スミス著『パワーゲーム—変貌するアメリカ政治』(上・下二巻、1990年)監訳、時事通信社他